
時空夢想記

蒼紫なつめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空夢想記

【Nコード】

N0163Z

【作者名】

蒼紫なつめ

【あらすじ】

それは、大切なものを護るための戦い。
譲れない大切なもの。

それを護るためなら、どんな事でもしてみせる。
たとえ、この手が罪に穢れようと……。
たとえ、どんなに犠牲を払っても……。

綺麗事だけじゃ、世の中やっていけない。

護りたい人がいる。失いたくない人がいる。

何にも代えられない大切な人がいる。

罪に穢れようと、愚かと言われようと、立ち止まらない。

罪に汚れた手が掴むのは、光（希望）か、それとも闇（絶望）か……。

物語の結末を決めるのは、神でも運命でもなく、少女次第。

この小説は魔法のiらんど様で連載していた同作品を転載したものに なります。

プロローグ

ぱたぱたと待ちきれないように時計を見ながら、動き回る少女が一人。

時計を見ては、目の前にある玄関の扉を見つめる。

少女　朔原千姫さくはら せんきは、それを何度も繰り返しながら、玄関の周りを歩き回る。

肩より少しだけ上の艶のある綺麗な黒髪に後ろはピンクのリボンがついている。

可愛らしい大きな紫苑の瞳は、今は不満を表していた。

千姫が時計を見て、玄関の扉を見る動きを何回も繰り返した時、玄関の扉が開いた。

それと、同時に先程までの不満そうな顔から一気に明るくなり、扉を開けた人物に飛び付いた。

「おかえり！　賢兄！」

千姫は、満面の笑顔で飛び付いた人物を見上げる。

賢兄と呼ばれた人の芯の強そうな綺麗な黒髪に眼鏡の向こうに見える優しさが窺える黒い瞳が、少しだけびっくりしたように呆けながら千姫を見つめる。が、すぐに不敵な笑顔を浮かべた。

「なんや〜？　しばらく、お兄ちゃんに会えへんかったから寂しかったん？」

少しだけおかしい関西弁で喋るこの人は、朔原賢さくはら けん。

千姫の兄で良く当たると最近有名になってきた占い師。

賢の占いの師匠は、とても有名な占い師でテレビや新聞などでも

取り上げられまくっている。

その師匠の元に占いを本格的に学ぶために賢は、長い間大阪に行っていて、今日久々に千姫達の家に戻ってきたのだ。

「あら、お帰りなさい。賢」

「あ、お母さん」

「母さん。ただいまー」

玄関の騒がしい様子に気付いたのか、千姫の母がリビングから出てきた。

賢が片手を挙げて、ヘラツと微笑むと母は、クスツと笑った。

「はいはい。お帰りなさい。賢が帰ってくるまで、千姫つてば、ずっと玄関の周りをうるちよろしてたのよ」

「なっ!？ お、お母さん! それは言わない約束だよ!」

「あらあら、そうだったかしら? ごめんなさいね。母さんも年かしら」

おほほと片手で口元を隠して、笑う母に対して、千姫は膨れた面で母を半眼で睨む。それに対して、母は涼しい顔。

そんな様子を見て、賢は懐かしそうに笑う。

「自分ら、相変わらずやな。全然変わつとらんやんか」

「賢兄こそ全然かわってないでしょ! それより、そのエセ関西弁はどうしたの?」

「エセ言うなや。しゃーないやろ。あそこに居るとうつるんや」

賢は、少しだけ何かを思い出すようにふっと優しげな笑顔を浮かべる。

「まあ、賢の口調はともかく、今日はご馳走にしましょうね」

「本当！？ やったーっ！」

「それでね、^{とじ}迅君も呼んできてあげて。私は、準備しなくちゃいけないから」

「はい」

母は、それだけ言うとそのくさと台所に行ってしまう。

千姫も靴を履いて、外に出ようとすれば賢も後ろからついてきた。

「あれ？ 賢兄も来るの？」

「おう！ 俺も久々に迅に会いたいんや。会うのは久々やからな。大っきくなってるんやろうな」

そう言っただけ懐かしそうにしながら笑った。

迅とは、千姫の家の隣に住んでいる千姫と同年の男の子の事だ。所謂、幼なじみ。

家が隣なだけ直ぐにつく。千姫が玄関でチャイムを鳴らすとしばらくしてから、扉の向こうから気だるそうな声が聞こえた。

「どちら様？」

「あ、迅！ 私だよ」

「……人違いです」

「ちよつと！ 明らかに迅でしょ！ めんどくさいからって、それはないわよ！ 出てきなさい！」

千姫がそう扉に向かって怒鳴れば、扉の向こうで、ハアと思いきりため息をつくのが聞こえた。

中から出てきたのは、当たり前だが千姫の幼なじみの^{くさなみとし}玖裳南迅。

薄い茶色の髪が無造作にはねていて、気だるそうに細められた薄茶の瞳が千姫とその横にいた賢を捉えた。

賢は迅を見ると、ニヤリと言う言葉が似合う顔で笑った。

「よう！ 久し振りやな！ どや、最近は？」

「賢兄。帰ってきたんだ。てか、何その関西弁」

「なんでお前ら皆、そこに食いつくねん！ ええやろ、別に」

少しだけ拗ねたように、ぷいと視線を逸らす賢に対して、迅はめんどくさそうにため息をついた。

「……で、何の用？」

「そんなん決まっとるやろ！ 大っきくなった迅を見にきたんや！
ほんまに成長したな」

「まあ、二年も経てばね」

にこにこ笑顔の賢に対して、迅もほんの少しだけ嬉しそうな顔をしていた。

小さい頃から、忙しい迅の両親は迅をよく千姫達の家に残けていた。

そのせいか、賢も迅を本当の弟のように大切にされていて、迅も表情には出さないが賢を兄のように慕っていた。

「あ、迅。千姫とは俺が居ない間、何も無かったやろな？」

につこりと笑っている賢の笑顔が黒いのは、きっと気のせいじゃない筈。

そう、賢は迅の事を本当の弟のように大切にしているけど、やはり千姫は別格らしく、二人の交際を認めようとはしないのだ。

可愛らしい容姿で人気者の千姫に彼氏がいたことがないのは、賢のせいなんだろうなと迅は賢に見つめられながらそんな事を考えた。しかし、迅より先に賢の言葉に反応したのは千姫だった。

「な、何言ってるんの賢兄！ 私と迅に何かあるわけないでしょ！
ただの幼なじみなんだから」

千姫の言いきった言葉に賢は満足そうだが、ある意味可哀想と迅に同情の視線を向ける。

迅は、呆れたように額に手を添えた。そして、千姫に彼氏が出来ないのは賢だけじゃなく、こいつの鈍感さも大問題だなと思い直したのだった。

人の事には敏感だけど、自分の事には鈍感すぎる千姫。

どんなに好意を見せても、さらりと受け流すこの娘をどうしろと？
迅は、更に呆れたため息をついた。

「あんまりため息ばつかつくと幸せが逃げるよ？」

「うるさいな。もう用は終わったんだろ？ 家に帰れよ。俺はもう寝る」

「駄目！ まだ用は終わってないの！ 今日、賢兄の帰りの祝いとして、お母さんがご馳走をつくるから、迅も食べに来るの。どうせ、家にいたってカップ麺とかしか食べないんだから」

強く迅を睨みながら、そう言い放ち、迅の腕を掴み無理矢理引き摺りだす。

それに迅は抗おうともがくが、やがて諦めたように千姫にされるがまま連れていかれた。

迅の両親は、今も忙しく海外を飛び回っているので、迅は一人暮らし状態だが、めんどくさがりやの迅は放っておくとご飯も食べないので、千姫がご飯を作ったりしてあげているのだ。

やはり、隣なので直ぐに家につく。

千姫は迅の腕を掴んだ状態で、扉を開けるとそのまま靴を脱ぎ、リビングへ向かう。

「お母さん。迅連れてきたよ」

「あら、迅君いらっしやい。あと、ちょっとで出来るからもうちょっと待っててね」

「あ、お構い無く」

そう返事をする、迅はすぐ側にあつたソファアに座つた。千姫も迅の隣に座ると、賢は千姫達の前のソファアに座つた。

そこからは、他愛のない話ばかりをしていた。

大阪の事。占いの事。学校の事。変わった事など。

別に特に変わった話じゃないけど、凄く楽しかった。

しばらくすると、千姫の父親も帰つてきた。

「おつ、迅君じゃないか。久し振りだね」

「お久し振りです」

「つて、ちょい待ち！ 父さん、なぜに俺をしかとすんねん！ 可愛い息子が帰つてきたんよ！？」

和やかに迅に笑いかける父に対して、賢は自分を指差しながら父に話しかける。父は、その言葉にふっと視線を賢に移す。そして、何か懐かしそうに瞳を細めて……。

「おお、お前は……」

「父さんっ！」

「どちら様でしたっけ？」

いきなり真面目な顔でのその言葉に賢は、漫画のようにずっとけた。

「賢兄。見てるこつちが恥ずかしい」

「……ふっ」

千姫は、少しだけ顔を赤らめ、迅は笑いを堪えていたけど堪えきれずに吹き出した。しかし、そんな事は気にせずに賢は父親を見つめる。とても悲しそうな顔で……。

それに堪えきれなかった父親は、盛大に笑いだした。

「……あははは。冗談だよ。冗談。……お帰り、賢」

「……父さん。うん。ただいま」

父親を少しだけ恨めしそうに見るが、父親の優しい笑顔に賢の表情も緩む。そんな時、やっと料理が出来た。

その後は、皆で料理を囲んで大騒ぎ。

幸せな家族。幼なじみ。仲の良い友達。勉強は嫌いだけど学校だつて楽しい。

そんな夢のように幸せの日々に満たされて、千姫の日常は続いていく。

そう、これ以上は何も望んでいなかった。これからもこんな幸せが続くと信じていた。

料理も食べ終わり、迅も自分の家に帰り、母は洗い物をして、千姫はお風呂に入っていた。

お風呂から上がり、部屋に戻る途中に賢と出会った。賢の表情には、いつもの朗らかさがなく、とても真剣な眼差しで千姫を見つめていた。

「賢兄。どうしたの？」

「……お前、近いうちにとてつもなく大きな運命に呑み込まれる。そんな嫌な予感がする」

「え？」

真面目で関西弁すら使っていない賢の真剣さに何故か背筋に寒気が走る。

そのせいか、賢には千姫が落ち込んでるように見えたのか、いつもの優しい笑顔に戻り、千姫の頭を撫でた。

「ま、気にすんなや。俺の気のせいかもしれへんしな。明日学校やる？ もう寝なや。……おやすみ」

「うん。……おやすみ」

賢の優しい笑顔に、乱れた心が鎮まっていく。そして、賢に笑ってから部屋に戻り、それから倒れ込むようにベッドに潜った。ベッドに入ると、一気に眠気が襲ってきて、そのまま意識を闇の中に引っ張られた。

赤い、赤い。燃えていく。大切なものが……。
殺されていく。大切な人達が……。

力がないものは泣くことしかできない。自分の非力さに泣くことしかできない。

……力が欲しい。

「……ゆ……め？」

目を開ければ、見慣れた天井。間違いなく自分の部屋。

千姫は、上半身だけ起こして、辺りを見渡してから、小さく息をついた。

詳しくは覚えてないけど、なんだか嫌な夢だった気がする。胸の奥がもやもやするが、気にしていてもしょうがない。

「よし！」

小さく呟いて気合を入れる。

時計に目をやれば、時刻は七時丁度。

勢いよくベッドから飛び出して身支度を整える。

リビングで用意されている朝食を食べていると眠そうに大きなあくびをしながら賢がやってきた。

「おはよう、賢兄」

「おはようさん。朝から元気やな」

「元気が私の取り柄だからね。さてと、じゃあ、もう行くね」

勢いよく椅子から立ち上がり、隣の椅子に置いてあった鞆を取り、扉を開けようとした途端。

「千姫っ！」

賢の叫び声と共に腕を強く掴まれた。千姫は、賢の突然の行動に驚いたように振り返った。

「びっ……くりしたー。どうしたの？」

「……え、あ……。悪い。気にすんなや。……ほら、はよ行かんと遅刻するやろ」

「賢兄が引き留めたくせに……まあ、いいや。行ってきます」

「気いつけていけや！」

賢の言葉に見送られながら千姫は、大きく頷いてから家を出ていった。千姫の出たいった後を賢は妙に真剣な顔で見つめていた。

千姫が家を一步出た途端、急にドクンッと心臓が大きく跳ねた。急激に頭に痛みが走る。胸が苦しい。

「……な、に……？」

突然の痛み是誰が答える訳もないのに問いかける。

……私を……呼んでる……？

突然の痛みがまるで自分呼んでるように感じて、千姫はおぼつかない足取りで痛みが導く方へと歩きだす。

迅の家の前を通り過ぎようとした時、丁度迅が家から出てきた。

「あれ？ 千姫。いつもはしつこいぐらい迎えにくるくせに今日は、素通り？」

迅が若干皮肉めいた口調で千姫に呼び掛けるが千姫は、聞こえていないのか迅を無視してそのまま歩きだす。

それに迅は不思議そうに千姫を見るが、千姫は迅を見ようとせずに学校とは反対方向の道に進む。

千姫の瞳には何も映さず、まるで操られて、千姫の感情がないように感じられる。

「ちよっ、千姫。どこに行くんだ？ そっちは学校と反対方向だぞ」

再び迅が慌てたように呼び掛けるが、千姫はそれすらも無視して歩き続ける。

迅はめんどくさそうにため息をついてから、千姫の後をついていく。千姫は無言のまま、道から外れて草むらの道を進む。

迅が何度も呼び掛けるが、千姫は無言で足早に歩き続ける。迅はいい加減に限界なのか呆れた口調で千姫に怒鳴ると同時に、突然草むらだらけの視界が開けた。

「千姫！ いい加減にしろよ」

強い口調で言い放てば、今まで何を言っても無言だった千姫の肩を掴んだ瞬間、びくんと跳び跳ねた。そして、瞳に光が 千姫の感情が戻った。千姫は、突然の事に迅を驚いた様に見つめた。

「びつ……くりしたー。なんだ、迅か。驚かせないでよね」

千姫は、胸を押さえて、ふうと安堵の息をつく。そして、何かに気づいたように辺りを見渡した。

「……ここ……どこ？」

「俺が知るか。千姫がここまで来たんだろう？」

「……私が？」

信じられないとでも言うように考え込む千姫に迅は、めんどくさそうに頭をかいた。

「ここは、神社？」

「それにしても、小さ過ぎだろ？ 多分あそこにあるのが祠だろうけど……」

かったるそうに迅が指差す先には、確かに小さいが祠みたくのがある。

なんだか胸が騒ぐ。

……呼んでいる？

「そんな事より、学校遅刻するぞ」

迅がそんな風に言っても千姫の視線は、祠から外れない。真っ直ぐ祠を見つめて……。

「なんだかあの祠、凄く気にならない？」

「……俺は、なんだか嫌な感じがする」

「そう、かな？ 近付いてみよっか」

「おいっ！」

迅が静止の声を掛けるにも関わらず、千姫は導かれるように祠へと近付く。迅も仕方なく千姫に続いて、祠に近付く。その時。

「あかん！ その祠に近付くな！」

「え？」

聞きなれた声に振り返ると同時に急に祠から眩し過ぎるほどの光が発せられた。

振り返った千姫の視線の先には賢が……。

どうしてこんな所にいるのだろうか？

そんな事を考える前に光に体が包まれていく。

「な、なな、何！？ 何が起こってるの！？」

『……見つけた。おいで、あなた 国へ……。運命を変

える 少女よ』

「誰！？」

突然、聞こえた声に辺りを見渡すが人の姿はない。所々、途切れ何と言っているのか分からない。

光に包まれる視界の中、迅も光に包まれていたのが見えた。

『……人々の愚かな戦いに終止符を……。手を汚す事を迷うな。道を迷えば大切なものは全て無くなる』

意識が段々と奪われていく。それでも、姿なき声は直接頭に響いてく。

『……期待している。尊き 戦 の 少女よ』

大事な所が聞こえないせいで意味が分からなかったけど、その声を最後に意識が途切れた。

意識が途切れる少し前に賢兄の叫び声が聞こえた気がした。

光が消え去った後、祠に残ったのは呆然とした様子の賢だけで、千姫達の姿は見当たらなかった。

「……千姫……迅……」

賢の言葉は、誰もいない虚空を虚しく響き渡った。

第一話 始まり

XXXX年 華籠^{かこのくに}の国。

「……やはり、話し合いは無理でしたか」

「うむ。だが、こうなってしまった以上、我々も戦うしかない。大切なものを護るために。玖零^{くわい}、力を貸してくれるな」

歳をとつても未だに鋭い眼光を玖零と呼ばれた青年に向けるのが、この 華籠の国の王様だ。

玖零は、実の父親の真剣な表情を見て、ふっと不敵な笑みを浮かべた。

「勿論です。この国のためなら、この笠野玖零^{かさのくわい}の力を存分にお使い致しましょう」

「頼もしい事だ。頼りにしているぞ、我が息子よ」

「はい」

玖零は力強く答えてから、深々とお辞儀をして、部屋を退出した。

「おい、あれ。木暮^{こくれ}將軍じゃないか」

「ああ、本当だな。横に居るのは鵜月^{うづき}軍師か」

「まったく王も何を考えているのか。あんな灰色の髪に銀髪の髪の

少年を將軍や軍師にするなんて……」

「全くだ。確かに剣の腕は立つかもしれないが、あんな素性の知れない奴等を優遇するなんて」

「……あんなあり得ない髪の色なんて、きっと妖かなにかだ」

二人の男性が、少し離れた所にいる、珍しいけれど、とても綺麗な灰色の髪と瞳を持つ青年とまだ幼く、あどけなさな残る、透き通るように綺麗な銀色の髪と瞳を持つ少年を見ながらそんな話を話した。

その声は大きく、まるで本人達にわざと聞こえるように言っているようだった。

それに銀髪の少年 鵜月徠牙やづきらいがは、ムツとした表情で二人の男性

の所に向かおうとするが、すぐに横にいた灰色の髪の青年 木暮こくれ

弥澄みすみに止められた。

「弥澄様！ でもっ……！」

「止めておけ。あんな奴等は放っておけばいいんだ」

弥澄にそう言われて、徠牙は、しゅんと頂垂れた。それを見て、弥澄は優しく笑う。しかし、その笑顔はどこか悲しげだった。

「ふん。腰抜けだな。王も早くあんな得たいの知れない奴等、城から追い出せばいいのに」

「全くだ」

「そこまで」

男が頷いた時、どこからか凜とした声が聞こえた。それに二人の男と弥澄と徠牙が声の方向に視線を向けた。

『玖零（様）！？』

弥澄と徠牙と男二人の驚きの声が見事に重なった。

そこには、不敵な笑顔を浮かべている、柔らかそうな黒髪に強い意思を感じる黒い瞳の青年　玖零が立っていた。笑顔の玖零だが、男二人を見る眼光は鋭い。

「……さて、俺の友人を侮辱すると言うことは、俺を侮辱するのと一緒にだ」

「そ、そ、そそんな滅相もない！　王子を侮辱するなど、とてもとても……」

「ふーん」

玖零の鋭い眼光で見つめられて、次第に男がしどろもどろに喋る。

「じゃあ、良く覚えときなよ。次に弥澄達を悪く言ったら、俺を敵にまわすってな。他の奴等にもそう伝えておけ」

『はいっ！』

二人の男は、ビシッと同時に敬礼してから、脱兎の如くその場から逃げ出した。それを見て、玖零はくすくすと楽しそうに笑う。

「……お前、本当に男には容赦ないな。まあ、助かったけど」

「当然だろ？　何が悲しくて野郎になんざ、優しくしなきゃいけないだ」

「じゃあ、もし、今の人達が凄く美人の女の人達だったらどうしてた？」

「……そんなのは決まってるだろ。もちろん、なにもしない」

当然の如く、真顔で言い切る玖零に弥澄と徠牙は呆れたため息を

ついた。

それを見て、玖零は何を考えているのかまた楽しげに笑った。

「……それで、話し合いはどうなったんですか？」

「下らない事を抜かしてないで、早く言え」

「そうですよ、兄様！ 話し合いはどうなったんですか！？」

「都架也、悠緋、白桜まで」

玖零が驚いたように突然現れた三人の男女を見た。

都架也と呼ばれた青年は、ひだまりのように暖かいオレンジ色の髪に優しいオレンジ色の瞳を呆れたように弥澄達に向けていた。

その横では、悠緋と呼ばれた見事なまでに純白の髪を後ろで緩く縛っている青年の夕日のように赤い紅の瞳が厳しさにより細められ、玖零を見つめる もとい、睨んでいた。

白桜と呼ばれた腰まで伸びた、さらさらストレートの淡い桜色の髪に髪と同じ優しい淡い桜色の瞳の少女も都架也、悠緋と同じように強い視線を弥澄達に向けた。

三人の強い視線を受け、玖零は、やれやれという感じにため息をついた。

「……話し合いは決裂。戦争まで秒読みって所だね」

玖零の言葉に弥澄達の表情が翳る。

「……そう、ですか……」

白桜の少しだけ、落ち込んだ声に皆が黙りこむ。だが、突如、パツと何かを叩く音が響き、皆が驚いた様に視線を移した。

そこに居たのは、両手を合わせて、力強く前を見ていた弥澄だった。

「……本当なら、話し合いで解決して、誰も傷付けないで、皆が平和に過ごせれば良かったけど……。大切な所を……。俺を認めてくれた皆を護るために……。俺は容赦しない。決して立ち止まらない。俺は罪を背負って生きる！」

それは、決意。大切なものを護るためなら自分を犠牲にする、他人も犠牲にする。

世の中は、綺麗事だけじゃ生きていけない。手を赤く染めても、自分の信念を貫くための決意。

弥澄の力強い決意の言葉に皆の顔にも覚悟の色が浮かぶ。それぞれがそれぞれの決意を胸に愚かな戦いの幕が上がる。

少しの肌寒さに千姫は軽く身動きした。そして、寒さのせいか、気が付いた様にゆっくりと目を開けた。

目を開いて、視界に映ったのは鮮やかすぎる程綺麗な青だった。そのあまりにも綺麗な青に目を奪われて、食い入るように真っ青な空を見上げた。

しばらく、呆然と眺めていて、そしてようやく気が付いたように辺りを見渡した。

千姫の視線に映ったのは、見渡す限りの新緑だった。

きらきらと日の光に当り、輝く姿はとても綺麗で幻想的だった。林のような場所にでもいるのだろうか？

見渡せば、木しかない事にそんな事を考える。

なぜ自分はこんな所にいる？

千姫は、必死に記憶を辿る。

……確か、学校に行く前に何かに呼ばれた気がして、気付いたら神社みたいな所に迅と居て……。

そうだ、祠！ そこにあった祠に近付いたら、いつの間にかいた賢兄が何かを叫んで、でもその時、祠が光を放って……それで気を失ったんだ。あれ？ でも、気を失う前に誰かに何かを言われた気が……。

考えても、何も分からない。

一体何を言われたのだろうか？ ……って、あれ？ そう言えば、なんで賢兄はあそこに居たのだろうか？ それに迅は？

千姫は、考え込むようにして顔をしかめる。しかし、やがて、パアツと晴れやかな笑顔を浮かべる。

「……なんだ！ 夢かー」

千姫の声に応えるものは、居ないが、千姫は構わず一人で喋る。

「……そうだよな。現実には祠から出た光に巻き込まれて、気付いたら違う世界でしたー！ なんて事は起こる筈ないもんね。やだ、一瞬信じかけちゃったよ！ 私ってば、漫画の読みすぎ！？」

妙にハイテンションで一人騒ぐ千姫。もちろん、それにツツコミを入れるものは誰も居ない。

「あー、びつくりした。それにしてもリアルな夢だな」

そう言って、千姫は座っていた状態から立ち上がり、軽く制服に付いた砂を払う。そんな千姫の背後に一人の人影が……。その人影

の手には一本の白銀に光る刀が……。

人影は、音もなく無慈悲にも千姫に目掛けて刀を振り下ろした。瞬間、千姫は知ってか、知らずか、横に動いた。

そのお陰で目測が外れた刀は、千姫の真横の何もない空を切り裂いた。

「な、な、な何!？」

千姫は、驚いたように人影を振り返った。そこに立っていたのは、見知らぬ男だった。

男は、チツと舌打ちすると再び千姫に刀を振りかざした。

千姫はそれを横に動いて避けると、男を指差して騒いだ。

「な、なななんですか、あなた！ 人の夢の中で勝手に刀を振り回さないでください!」

「黙れ！ 華籠の国の奴等は皆殺しだ!」

「は？ 華籠の国!？ どの事ですか!？」

千姫が叫んでも、もう男は何も言わずに千姫目掛けて刀を振り下ろす。

一体何なの!？

混乱しまくった頭を必死に落ち着かせながら、刀を避ける。

なんで、夢の中で殺されそうにならなきゃいけないの!？ ……

夢？ そうか、夢なら……何をしても大丈夫よね？

そう考えた千姫の行動は早かった。

男の刀を避けながら、近くに落ちていた丁度いい太さの木の枝を拾い、構える。

その行動に男は、馬鹿にするように笑う。

「はっ、そんなんで戦おうって言うのか?」

「そうよ。悪い？　あなたなんてこれで充分よ」

それが合図だったかのように男が駆け出した。男の刀を千姫は、木で防ぐ。

防いですぐに、テレビや漫画、アニメなどの知識を元に適当に木を振ってみる。しかし、そんな漫画の中だけの知識で戦える筈もなく、結局は防戦一方だった。

只の木で刀を受けきれぬ筈もなく、何度も繰り返すうちに当然の如く木は傷付き、すり減っていく。

何度目かの剣撃を受けた時、ついに耐えきれなくなった木が折れた。

男の刀は、そのまま振り下ろされ、千姫の腕を切り裂いた。

「……っ！」

千姫は、慌てて腕を押さえる。押さえた所から、どんどん血が溢れる。

ドクンドクンと、傷口が鼓動のように跳ねて、熱い。凄まじい痛みが体を駆け抜ける。

……信じたくないけど……夢じゃ、ない……？

そう考えれば、突然今まで襲ってこなかった恐怖が一斉に沸き上がる。体が震える。

怖い、怖い！

ぺたりと、力が抜けたように地面に座り込む千姫を男は楽しそうに見下ろした。

「……これで、終わりだな」

男の声と共に千姫に向かって刀が振り下ろされる。逃げようとしても、力が抜けた体は動こうとしない。

もう駄目だ！

思わず、ギョツと力強く目を瞑った。
目を瞑った千姫の耳に届いたのは、凜々しさを感じる男の声だった。

「……月下心道流三の型。げっかしんどうりゅう 半月双刃。はんげつそうは」
「がっ！」

続いて、聞こえた男の呻き声。千姫は、おそろおそろ目を開く。
目を開いた千姫の視線の先にいたのは、珍しいけれども綺麗な灰色の髪に髪と同じ灰色の瞳の青年だった。

……綺麗な灰色の髪。

思わず、男の髪を見つめてしまう。そして、すぐに事態を確認しようと思いを凝らせば、灰色の髪の青年のすぐ横に先程まで千姫を襲っていた男が横たわっていた。

その体からは、血が溢れ出していて、地面が朱に染まっていた。

……死んでる。

その事に思わず吐き気が込み上げる。

口元を押さえて、吐き気を堪えていると、後ろから男が心配した様子で近付いてきた。

「おい、大丈夫か？」

そう言っ、男が千姫の肩に手を掛けた瞬間。

「嫌っ！」

千姫は思いつき、男の手を叩いた。それに千姫は、ハッとして思わず男の顔を見る。

良く見れば、男の顔には先程の男の返り血が……。その事に、叩

いた事を謝ろうとしていた千姫は、言葉を呑み込んだ。

男は対して気にした様子もなく、ただ真っ直ぐ千姫を見つめて、それから先程の男に斬られて、怪我している方の腕を引っ張った。

「いつ！」

「大人しくしている」

男はそれだけ言うと、血が出ている千姫の腕を白いタオルのようなもので縛りだした。

強い力で縛られて、激痛が走る。しかし、せつかく手当てをしてくれているので、我慢して歯をくいしばる。

「応急処置だが、これでとりあえずは大丈夫だろ」

「……ありがとうございます」

千姫の腕には綺麗にタオルが巻かれていた。

男は、立ち上がると辺りを見渡してから、視線を千姫に戻した。

「……で、なんでこんな所を女一人で彷徨っている？ あれほど単独行動はとるなど……。あれ？」

男は、今までの凜々しい雰囲気から不意に拍子抜けしたような雰囲気に変わる。

な、なに？

思わず千姫が身構えると、男は、ジッと千姫を見つめる。

全身をジッと見つめられて、千姫もどうしていいか分からずに思わず一歩後ろに下がる。瞬間、いつの間に抜いたのか男の刀が千姫の首元に突き付けられた。

「動くな。一歩でも動いたら斬る」

男の言葉に千姫は、コクンコクンと何度も頷いた。すると男は、少しだけ雰囲気缓解了が、まだ厳しい雰囲気のまま千姫を見つめた。

「……お前何者だ？ 俺達の隊服に似ていたから、思わず助けたが……。俺達の服とは違う。それによく考えたら軍に女って白桜しかないからな」

値踏みするかのような男の言葉に千姫は何も言えない。男の威圧感が怖くて、声が出なかった。しかし、男が言った俺達の隊服と言う言葉に千姫は思わず男の服を見た。

セーラー服を基調としていて、白をメインに腰の所で二本の水色の紐をリボン結びにしている。

肩の所で切れ込みが入っていて、右腕の所に四つのピンク色の花びらを真ん中にして、花の左後ろに黒い三日月が書かれていて、それが丸く黄色で囲ってある紋様みたいなのが書いてあった。後は、腰の所に日本刀のような刀を差していて、白いズボンをはいていた。確かに、セーラー服と似てるかも……。

そんな事を考えていれば、男の刀が再び、千姫の首に近付く。

「何者だと聞いているんだ。答えろ」

「……な、何者って言われても……。私は、普通的女子高生です！」

「女子高生？ なんだそれは？」

「え？ そう言われても、女子高生は女子高生だし……」

厳しい瞳で見つめられれば、次第に千姫の言葉もしどろもどろになっていく。男は、しばらく千姫を見つめたあと、ふっと厳しい雰囲気解いて、刀をしまった。

「……まあ、お前の事は玖零に任せるか。……よし、ついてこい」
「は、え？　ちょ、ちよつと、どこに行くんですか？」

男は無理矢理千姫の腕を掴むとそのまま歩き出す。千姫はもがくが、男の力は強く、千姫はなすがままに引きずられていった。やがて、千姫は諦めたように大人しくなり、そして、男の顔を見る。

千姫と、その年はかわらなそうな顔立ちの青年。

先程まで返り血がついていた顔は、今は服で拭き取られていた。白い服が所々、朱に染まっている。

……この人は、平然と人を殺した。

その事が千姫に恐怖を抱かせる。

自分はこれからどうなるんだろうか？

最悪な想像ばかりが頭をよぎる。

……それでも、本当に何となくなんだけど、微かに千姫の中には安心があつた。それが、その男の年が近いからなのか、自分が殺されるなんて漫画の中みたいなのが信じられないのか、良く分からないけど、なんだかこの男は大丈夫そうな気がした。

手当てもしてくれだし、良い人なのかもしれない。

先程、目の前で人を殺したのに？　自分も殺されそうになったのに？

千姫の中で二つの感情がぶつかり合うけど、自分の直感が告げている気がする。

この人は、大丈夫だと……。

そう考えた千姫は、自分の思考が最悪な予想を考えないように先程から黙り込んで黙々と歩いている男に話しかけることにした。

「……あの」

「なんだ？」

まだ厳しさが残るが、さつきとは違い、威圧感がだいぶなくなっ

た声で男は視線だけ、千姫に向けた。

千姫はその視線に一瞬だけ怯んだようだが、すぐに意を決したように口を開いた。

「……あ、あなたの名前は、何ですか!？」

千姫はそう言った後、後悔するように頭を押さえた。

「……………」

あー、もう！ 私の馬鹿！ なんて名前なんか聞いているのよ!？
とっさに話が浮かばなかったとしても、名前を聞くななんて……。
千姫がそんな事を考えている横では、男が怪訝そうな顔で千姫を見た。

「なんでお前に名前を名乗る必要がある?」

最もな正論を言われて、千姫は何も言えなくなる。

千姫は、いわば捕虜の分際なのだ。いつ殺されてもおかしくない。
そんな奴に名前を名乗る必要はどこにもない。しかし、千姫は自分から名前を聞いた手前、ひけなくて暫く思索していたが、突然思い付いたように、パアと笑顔になった。

「……ほら、名前知らないと不便だし」

「お前は捕虜だ。玖零の判断次第では即お前を殺す。名前を知らなくとも不便はない」

「あなたになくても私は不便なの！ それにほら、良く言うでしょ！
！ 人の出会いは一期一会だって！ 一生に一度会えるか分からないんだから」

千姫が強くそう言えば、男はポカンと呆然とした様子で千姫を見つめた。

「だから、あなたと私が出会えたのは何かの縁って、ことなんだから！ 名前を教えてください！」

呆然とした様子で千姫を見つめていた男は、千姫のその言葉を聞いて、堪えきれないように笑い出した。先程までの威圧感を放った人とは思えない程の無邪気な笑顔に千姫の心臓が大きく跳ねた。

「ははっ！ お前面白い事言うな。……まあ、お前の言うことも一理あるしな」

「じゃあ……っ！」

「弥澄だ。木暮弥澄。お前は？」

「千姫！ 朔原千姫です！」

千姫は明るい笑顔を浮かべて弥澄と名乗った青年に手を差し伸べた。

弥澄は差し出された手にきょとんとしてから、ふっと表情を緩めて、千姫の手を握り返した。へへと楽しそうに笑う千姫に弥澄も穏やかな笑顔を向けた。だが、直ぐに厳しい顔つきに戻る。

「……でもまあ、まだお前が敵か味方が分からないしな。とりあえずは大人しくしてろよ」

「はい」

千姫は大人しく従い、弥澄の後をついていった。

弥澄は千姫のその態度に安心したのか、先程から離れていた腕を再び掴まえる事はしなかった。

しばらく、歩けばお城のような大きな建物に着いた。

門の所には、強面の兵士みたいな人達が数名立っていた。

兵士達は弥澄を見ると敬礼してから、門を開けた。しかし、その瞳はどこか冷たく、また千姫を見る目も好奇の中に厳しさが混じっていた。数名の兵士が千姫達を見ながらこそそこそと何かを話していた。

なにこの人達、感じ悪い。

そんな事を千姫が思っていると前から、綺麗な銀色の髪に透き通るような銀の瞳のまだあどけない顔立ちの小柄な少年が駆け寄ってきた。

少年は千姫達の目の前で立ち止まり、花のように可愛い笑顔で微笑んだ。

「弥澄様！ お帰りなさいませ！ …… って、あれ？ その女は？」

少年の大きな銀色の瞳が千姫を映す。弥澄も少年に言われて、ああ、と頷いてから千姫に視線を移した。

「森で乞王の国の奴等に襲われていたのを助けた。仲間かと思ったが俺達の隊服とは、微妙に違うし、敵か味方が分からないから、とりあえず連れてきた」

「へー。そうなんですか」

少年の瞳は千姫を見つめたまま。子供のものとは思えない程の鋭い眼差しで見つめられて、千姫は体を固くした。

「徠牙」

「はい」

「こいつを縄で縛ってから玖零の元に連れていけ。暴れないだろうが、念のためだ。俺は先に行って、玖零に事情を話しておく」

「わかりました」

徠牙と呼ばれた少年が頷くと、弥澄は満足そうにしてから、先に歩きだした。

徠牙はその背中を見送ってから、くるりと方向転換して、いつの間にか持っていた縄で千姫の腕を後ろ手に素早く縛った。

あまりに手慣れた手つきに千姫は、しばし呆然と徠牙を見つめた。一方、徠牙は千姫の視線など気にせず、手を縛り終えると、再びくるりと方向転換してから歩き出す。

「ほら、早く着いてこい」

子供とは思えない程の偉そうな態度に千姫は、少しムツとしたが相手は子供と自分を抑えた。そして、そのまま広い廊下をスタスタと先に歩く、徠牙の後を千姫も追う。しばらくして、千姫は前を歩く徠牙に話しかけた。

「ね、ねえ、徠牙君っていったけ？　いったい……」

千姫の言葉が途中で止まる。なぜかと言えば、話しかけた瞬間、目の前を歩く徠牙がピタリと足を止めて、千姫を振り向いたから。それも物凄く冷たい表情で……。

「……いま、徠牙“君”って言ったよね。あんた、僕の事を子供だと思っただけで甘く見てるでしょ？」

「え？　べ、別にそう言うわけじゃ……」

あまりにも冷たい視線に思わず怯む。瞬間、目の前にいた筈の徠牙は消えていて、いつの間に抜いたのか徠牙の手には刀が。

そして、その刀の切っ先は千姫の首に当てられていた。あと、数

ミリでも動かせば千姫の首は斬られる程近付けられていた。その事に千姫は息を呑む。

「馬鹿にしないでくれる？ 子供だって人殺しくらい、簡単に出来るんだよ。いま、この刀を少しでも動かせば、あんたの命なんか簡単に消えるだろうね」

先程、弥澄に向けていたあの可愛いらしい笑顔の少年と同一人物とは思えない程、感情が読めない冷めた表情と冷たい声に千姫は何も言えずにいた。

徠牙の冷たい声と共に首筋の刀が少しだけ首に当てられて、当てられた所からは痛みが走り、血が流れた。

「……………」

しばらく、徠牙の冷たい視線が千姫を睨むが、不意に視線を逸らして、そのまま歩き出してしまう。千姫は、自分の首を触り、首がちゃんとある事を確認してから、ようやく安堵の息をついた。

「…………早くしてくれる？」

もう大分先まで歩いてしまった徠牙の冷たい声が聞こえて、千姫は前を向く。

前を見れば、徠牙の冷たい視線に射ぬかれて、千姫の背中に寒気が走るが、いま着いていかなければ今度は本当に殺されそうなので唇を噛み締めて、気を強く持ち、徠牙の後を着いていった。

無言のまま、しばらく歩けば、大きな扉の前についた。

徠牙は、その扉を二回軽く叩いた。

「鶴月です。女を連れてきました」

「入れ」

中から凜々しい男の声が聞こえて、徠牙は、失礼しますと声を掛けてから扉を開けた。

「弥澄から話は聞いている。で、その女は？」

「そこにいます。早く入れ」

徠牙に冷たい視線で中に入れと言われて、千姫は恐怖を隠して、言われたように中に入った。

中に入った千姫の目に真っ先に映ったのは、柔らかそうな黒髪に意思の強そうな黒い瞳のやけに気品のある雰囲気の中でも整った顔立ちの美青年だった。その横には弥澄もいた。

男は、千姫を見た途端、ふっと口を緩めた。それを見た弥澄は、しまったとも言つように、はんば呆れながら額に手をやった。

しかし、千姫にはその行動の意味も分からずに強張った顔で不安そうに瞳を揺らしていた。その時、椅子に座っていた気品のある黒髪の男が立ち上がり、真っ直ぐ千姫の元へ向かう。

その行動にこの世界に來た時から今までの経験からか、また刀を突きつけられるのかと思って、千姫は体を固くした。次の瞬間、感じたのは刀を突きつけられる感覚ではなく、優しく髪を撫でられる感覚だった。

「そんな不安そうな顔をしないで。可愛らしい顔が台無しだよ。まあ、不安気な顔も可愛いけど、やっぱり笑顔が見たいから」

予想していた展開と全く違う展開に今までこんなストレートな言葉を言われた事のない千姫はみるみる顔を赤くした。

「おや、赤くなってる。ふふ、可愛いね。俺は笠野玖零。可愛らし

い姫君。お前の名前は？」

「……朔原……千姫、です」

「千姫、か。可愛いお前にぴったりの名前だね。よろしく、姫君」

髪をさわっていた玖零が千姫の流れるように綺麗な艶やかな黒髪に優しく口付けをする。そして、そのまま目遣いで、真っ赤になつて口をパクパクさせている千姫に向かってウインクをする。

とてつもない美形にそんな漫画みたいな事をやられて、千姫は茹でだこみたいに真っ赤な表情で玖零を見つめる。

「な、な、なな、なあーっ!？」

「ふふ。本当に可愛いね」

玖零が再び千姫に優しく微笑んだ瞬間、パンと良い音と共に玖零の頭が叩かれた。玖零は叩かれた頭を押さえて、頭を叩いた人物を勢いよく睨みつけた。

玖零の視線と同じように千姫も視線を動かす。

そこにいたのは、見事なまでの純白の髪を後ろで緩く縛っている青年だった。厳しさによって細められた夕日のように赤い紅の瞳は玖零を睨みつけている。その手には、大きなハリセンが……。

「い……ったいな！ 何すんのさ!？ 悠緋!」

「いい加減にしろ、馬鹿王子。敵かもしれない奴を口説くな」

「仕方ないだろ。そこに天女のように美しい姫君がいたら、口説きたくなるだろ」

「どこをどつという風にとつたら、仕方ないのか教えてほしいものだな」

悠緋と呼ばれた青年と、玖零の明らかに陰悪な言い争いに千姫は、

困ったように玖零と悠緋に視線を移してから、弥澄に助けを求めるような視線を向けた。弥澄は諦めるとでも言う風に首を横に振る。それに、千姫は愕然とした表情をした時。

「玖零。悠緋も。喧嘩は止めてください。その人が困っているでしょう」

たしなめるような穏やかな声が聞こえた途端、言い争っていた玖零と悠緋の動きがぴたりと止まる。

天の助け！

そんな思いのせいか、千姫は勢いよく声の主を振り返った。

そこにいたのは、ひだまりのように暖かいオレンジ色の髪に優しげなオレンジ色の瞳の穏やかな雰囲気青年だった。

千姫には、きっとその青年の後ろに後光が差してるように見えただろう。……けど、だけど、その青年の穏やかな微笑みに玖零と悠緋は、石のように凍りつき、滝のような汗を流す。

もちろん、弥澄と徠牙は自分に火の粉が飛んでこないように他人のふり。しかし、そんな異様な雰囲気千姫は感動のあまりか気付いてなかった。

「……と、都架也。悪かったよ。反省してる」

「すまない」

「おやおや、なんだか喧嘩を止めた僕が悪者みたいになってるじゃないですか？ 全く酷いですね」

にこにこ笑いながら、そんな事を言う都架也と呼ばれた青年の態度に、さすがに千姫も周りの異様な雰囲気気付いたのか、再び困ったように考え込む。

「……さて、お遊びはここまでとして。……ええと、千姫さん？」

で、よろしかったですか？」

「あ、はい！ 朔原千姫です」

「僕は那賀櫛都架也なかくしとかやと言います。以後、お見知りおきを」
「はい」

千姫が元気よく、そう返せば、都架也は、ふふつと優しい笑みを浮かべながら、手の縄を解いてくれた。

……それにしても、この世界は美形しかないのかな？

思わず、千姫がそう思うほど、この世界に来てから、出会う人達が格好よすぎる。

弥澄も徠牙も玖零も悠緋も都架也も……。

……本当に漫画みたい。漫画のお約束。登場人物は、皆美形！
みたいな……。

自分の考えに思わず、苦笑する千姫の横で、やっと、玖零が不敵な笑顔を浮かべた。

「……で、都架也はどうしたのさ？」

「ああ、僕も弥澄殿と同じですよ。服が乞丐こつみの国の隊服にそっくりで、でも微妙に違う怪しい人物を見つけたんで、玖零に判断してもらおうと……」

「なるほど、ね。……で、そいつは？」

「あちらにいます。ちょっと呼んできますね」

都架也は、そう言っ指を差した部屋に向かう。

……私と同じような怪しい人物。それってさ、もしかして……。千姫がそう思ったのと同時に都架也が向かった部屋の扉が開かれて、中からは、千姫がよく知っている人物が現れた。

めんどくさそうに緩んだ瞳は千姫を映して、厄介そうにため息をついた。対して、千姫は驚いたように大きく口を開けて、その人物を指差した。

「と、迅!？」

「……………」

千姫に指を差されて、名前を叫ばれた迅は、めんどくさそうに眉をしかめて、しばらく考えた表情をしてから、いつもの仏頂面で……。

「あー、人違いです」

「何言ってるのよ! どこからどうみても迅でしょ!」

千姫が迅に歩み寄ると、迅はあからさまに顔を逸らしながら、

「だから人違いだって……」

「まだ言うの!？」

千姫はめんどくさそうに視線を逸らす、迅の頬を引っ張り、強い眼差しで迅を睨んだ。それに迅は、ハアと小さくため息をついてから、ようやく千姫を見た。

「んで、千姫もいるって事はやっぱり夢じゃないんだ。……ハア。めんどくさ」

「うん。夢じゃないみたいね。まだ、信じられないけど……。でも、それよりも」

ふと、千姫の視線が迅から周りに移される。迅も千姫と同じように周りに視線を移す。

そこには、ジーツと千姫達を見つめる弥澄達の姿があった。まだ、敵か味方が分からない千姫達を見定めるかのように鋭い瞳を千姫達に向ける。その瞳には、どこか敵意を隠しているような気がする。

「東の森で迷っていた所を僕がを見つけました。乞王の国の隊服を着ていたので斬ろうと思ったんですか、微妙に違うみたいなので、とりあえず、連れてきました」

都架也が迅を見ながら、そう説明すると、玖零は興味深そうに迅の全身を見てから、千姫の全身も見る。

「……なるほど、ね。ま、冗談はここまでにして」

「……絶対冗談じゃなかったくせに。あれ、本気で口説いてたぞ」
「そうですね。僕も弥澄様の言う通りだと思います」

弥澄と徠牙の言葉は、玖零によって見事に黙殺される。その事に少しだけ、不満そうな顔をする二人だが、再び千姫達を見つめた時の瞳は鋭い。

千姫がその事に体を固くした直後、鋭い音と共に首に刀を突きつけられた。刀を突きつけたのは、玖零。

玖零には、先程までの柔らかな雰囲気はなく、千姫達を見定めるかのように鋭い瞳で千姫達を見つめていた。

「……それで、あんた達は何者？ 乞王の国の間者？ 正直に答えろ」

「……わ、私達は……」

声が震える。声だけじゃなく、千姫の体自体が震えていた。

元々、普通の高校生として平穩に過ごしていた千姫にこんなに敵意をむき出しの殺気を浴びた事はないのだ。なのに今は、千姫を取り囲む無数の殺気がある。それに言葉が出てこない。体が硬直して、何も出来ない。

そんな時、千姫を庇うように横にいた迅が千姫の前に立ち塞がっ

た。

「……と、し？」

「……はあ。本当にめんどくさい事になったな」

千姫を庇った事により、玖零の刀を自分の首に当てられたというのに、いつも眠そうに緩んだ瞳は、普段と何ら変わらずに刀を見つめた。

「……あんたら、俺達を何者って言っけどさ、俺達だって、あんたら何者って聞きたいんだけど？」

「なんだと？」

迅の言葉に弥澄がピクリと反応した。それに迅は、いつものめんどくさそうな雰囲気のまま弥澄に視線を移した。

「だって、そうだろ。俺達だって自分達に何が起こったのか未だによく分からないのに、突然変な所に連れてこられて、刀を突きつけられて、何者って……。意味分かんないし、あんたらこそ誰だよ」「何者が聞いているのは、こっちだ。あんたの下らない戯れ言なんかに答える必要ないね」

「……戯れ言、ね。じゃあ、俺もその下らない戯れ言に答える必要はないね」

刀を向けられ、無数の殺気を浴びても迅は毅然とした様子で怯む事なく、真っ直ぐ玖零を見つめ返した。それに玖零は、迅を見定めるように見てから、不敵に笑った。

「ふーん。答える気がないんだ？ ……じゃあ、ここで死んで」

その言葉と同時に玖零の刀は迅に向かって振り下ろされた。それは、迅が避けられる筈もなく……。

しかし、玖零の刀はいつの間にか刀を持っていた迅によって防がれた。

「なっ！」

それに玖零は驚いたように一步後ろに下がる。迅はというと、恐怖で委縮してしまった千姫を背中であぐらなで、千姫に向かって、いつものだるそうな口調のまま言った。

「ちょっと、千姫。何これくらいの事で固まってるの？ あのやかましい程の気の強さはどうしたんだよ？ まさか、千姫がこれくらいの事で、へこたれる事なんてないだろ？」

迅のその言葉は、恐怖に震えていた千姫の心を強く揺さぶった。床を見つめていた視線は、ゆっくりと上に移動していき、迅を見る瞳は先程までの恐怖の瞳ではなく、いつもの気の強い千姫の瞳だった。

「当たり前でしょう。私がこれくらいの事で……。でも、そうね。確かに私らしくなかったね。ありがとう、迅」

千姫の言葉に迅は、何も言わないが口には微かに笑みを浮かべていた。千姫は真っ直ぐ玖零を見つめて、強く凜とした口調で言い放った。

「私達の話も聞いてください。信じてもらえるか分かりませんが、それでいいなら包み隠さずお話します」

「ふーん。でも、お前達の話信じるなんて、よっぽどの事がない

限り、無理だね」

「私達が話したとしても、信じてもらえる可能性は少ないと思います。……でも、話だけは聞いてくれませんか？」

「嫌だと言ったら？」

玖零の冷たい視線に怯む事なく、千姫は真っ直ぐ玖零を見つめ返した。

「だったら、今すぐその刀で私を斬り伏せばいい！ 私は逃げたり防いだりもしない！……さあ、やりなさい！」

あまりにも毅然とした態度で言い放つ千姫に弥澄達は呆氣に取られたように静まり返る。その中でも、玖零だけは不敵な笑顔を浮かべていた。

「ふーん。なら、ばいばい」

ヒュツと素早く刀が振り下ろされた。しかし、千姫は言った通り避けようともせず、目も瞑らずに、ただ真っ直ぐ玖零を強い瞳で見つめていた。

玖零の刀は、寸分の狂いもなく千姫の頭に目掛けて振り下ろされ……。

本当にあと数ミリ深ければ千姫の頭を切り裂いていた程ギリギリの所で止まった。

千姫は、それでも目を閉じることなく真っ直ぐ玖零を見つめていた。玖零は、ふっと笑ってから困ったような笑顔を浮かべて、刀を鞘に納めた。

「……本当に動かないとはね。……うーん、仕方ないからその根性を認めて、話だけは聞いてあげるよ」

やれやれと言うように呆れたため息をつく玖零に千姫は、パアツと明るい笑顔になった。しかし、その千姫の頭を後ろから迅が叩いた。

「いったあ！……何すんのよ!？」

「何すんのよ？ じゃないだろうが、この馬鹿千姫！ 誰がそこまですれって言った！ こっちの心臓が止まるかと思っただろ！」

「あはは、ごめん。つい……」

「つい……。で、済むか馬鹿！ つい、で死んだらどうすんだ！ この大馬鹿！」

迅の剣幕な表情に千姫も少し反省したように頂垂れた。そんな千姫の様子を見て、迅は呆れた表情でため息をついた。その時。

「兄様！」

そんな声が聞こえて、迅と千姫は不思議そうに、玖零はビクツとした様子でおそろおそろ声の主を振り返った。

そこに立っていたのは、女神のように美しい少女だった。腰まで伸びた、さらさらストレートの淡い桜色の髪と同じ淡い桜色の瞳で少女は、玖零を睨む。玖零はやけにひきつった笑顔で少女を見つめた。

「は、白桜。そ、そんなに目を吊り上げたら可愛い顔が台無しだよ」
「余計なお世話です！ それより兄様見てましたよ。いくら敵かも知れないからって無防備の相手にいきなり刀を突きつけるなんて！」
「……まあ、落ち着け。白桜。俺は、玖零のしたことは正しいと思うぞ？」

弥澄の言葉に白桜と呼ばれた少女は、玖零から弥澄に視線を移した。白桜の強い視線を受け、弥澄は、うっと身構える。

白桜は、強い眼差しのまま弥澄を見つめるが、そのうち、ハアとため息をついた。

「……そんな事くらい私だって分かってます。敵かも知れない人に情けをかけたらこちらがやられる可能性があるから……。でも……」

しゅん、とした様子の白桜の頭に玖零が優しく手をおいた。

「お前の言いたい事は分かる。でも、俺はこの国を第一に考えなきゃいけない」

「……そう、ですね。我儘言っでごめんなさい」

頭を軽く下げて謝り、顔を上げた時に突然の事に呆然としていた千姫と目が合った。その事に少しだけ頬を朱に染めて、白桜はふわりと微笑んだ。

「見苦しい所を見せて、ごめんなさいね。……私は、筑炉規白桜。つくろぎはくおう

白桜って呼んでね」

「あつ、朔原千姫です！」

白桜の美しさに見とれていたのか、慌てた様子で千姫は名を名乗った。

それに白桜は、優しく微笑んだ。

「……さて、大分話がずれましたし、本題に入りましょうか。玖零」
「ああ、そうだね。じゃあ、姫君達の話聞いてあげるよ。話して」
「うん」

何を考えているか分からない笑顔で、千姫達に視線を向ける玖零。それに、千姫は居住まいを正してから、軽く咳払いをしてゆっくりと話し出した。

大体は千姫が話すのだけど、時々、捕捉のように迅がめんどくさそうに付け加える。千姫達の話聞いていく内に段々と弥澄や玖零達の表情が険しくなる。

何かを考えるように顔をしかめる。他の人達も信じられないというような表情で、黙って話を聞いていた。

一通り話終わり、千姫はちらりと辺りを見渡す。

……信じてもらえる訳ないよね……。自分だって、まだ信じられないのだから。

「……つまり、要約すると、お前達はこことは別の世界から来て、普通の高校生だったから、この世界の事もこの国の事も何も分からない無関係の人間だと言うことか……。信じられないな」

「そうですね。話としては面白いですけど、実際にとなると……」

厳しい顔付きの悠緋の言葉に都架也も考え込むような表情になる。

「ま、信じられなくて当然だろうね。当事者の俺達だって、未だに信じられないんだから。……本当に夢なら良いのに、めんどくさい」

ハア、と疲れた様子でため息をつく迅に千姫も困ったように表情を曇らせた。

「確かに信じられない話だが、俺にはそいつらが嘘をついてるようには見えないぞ」

「そう、ですね。まあ、世の中には僕達が知らない事も沢山ありますし、異世界から……というのも、あると思います」

「真っ直ぐな綺麗な瞳をしているもの。嘘をついているとは思えないわ」

あまり信じていない悠緋、都架也に対して、意外にも肩を持つてくれたのが、弥澄、徠牙、白桜だった。

「……信じて、くれるんですか？」

ぱあっと、千姫の表情が明るくなる。それに白桜は優しく微笑んで頷いた。

「……戦姫物語」
せんひめものがたり

「え？」

ぽつりと呟いた玖零の言葉に千姫は思わず聞き返した。しかし、玖零は何か思案している様子で黙り込むだけだった。

「そうですか。……確かにそれなら納得できるような気がしますね」

「だが、あれはただのお伽噺だろ？」

「お伽噺とは限らないじゃない？ 伝説なんだから、本当の可能性だってあるよ」

お伽噺だと信用していない悠緋に徠牙は子供のものとは思えない程、凜とした口調でそう言った。

「戦姫物語って何？」

「俺が知ってる訳ないだろ」

千姫は隣にいる迅に聞くが、迅は呆れた表情でそう返した。

「戦姫物語とは、昔から伝わっている誰もが知っている程有名なお話よ」

白桜がそう言って、ゆっくりと話し出した。その内容は、こうだった。

天と地の二つの国が争い、国滅びると言われた時、異世界から一人の少女が降り立った。

少女は気高い皇族の血を引く者で本来ならば護られる筈の立場の者だった。

少女は大切な者を護るために自ら刀を持ち、手を罪に染めながらも怯む事なく、容赦なく敵を斬っていく。

そのあまりの強さと容赦のなさには人々は恐怖した。しかし、返り血を浴びてもなお、毅然とした様子でどこか神々しさを感じる少女を人々は、こう言った。

“戦姫”と。

やがて、少女の活躍により戦には終止符が打たれかけたが、不思議な力を使う者達の登場により、国は再び戦場になった。

そして、少女は自ら不思議な力を使う者と戦い、見事に勝利をした。

自らの命と引き換えに。

大切な者を護るために自らの命も省みずに戦った少女の哀れで悲しい物語。

これがそのお話よ、とゆつくりと語った白桜に対して、迅は本当にお伽噺だな、と小さく呟いた。

けれど、千姫の胸にはお伽噺と考えるよりも先に悲しいという感情が浮かんできた。

大切な者を護るために自らの命を犠牲にした戦姫は、一体どういう気持ちだったのだろうか？

大切な人を護れて、嬉しかったのかな？ それとも……。
なんだか、胸が妙にざわついた。

「……まあ、お伽噺だろうと、なんだろうと、こいつらがこことは別の異世界から来たって事は信用してやってもいいんじゃないか？」
「そうだね。まだ、完璧に信じた訳じゃないけど……。ま、こんな可愛い姫君が嘘をつく筈がないしね」

ふっと、話を変えるように言った弥澄の言葉に玖零も柔らかい雰囲気に戻り、笑った。

「それじゃあ……っ！」

千姫の顔が、パアッと明るくなった。玖零は優しい微笑みを浮かべた。

「まあ、完璧に信じた訳じゃないから、監視ということで、しばらくここで暮らしてもらおうよ」

その言葉に迅は怠そうに口を挟んだ。

「そんなことより、俺達は帰る方法を探したいんだけど。あんたら

は何か知ってるの？」

「残念ながら何も」

「そう言うわけで君達は、帰る方法が分かるまで、結局はここにいろしかないんですよ」

穏やかに微笑んでいる都架也の後ろに黒い気配が見えるのは、きつと気のせい……のはず。

「じゃあ、まずは改めて自己紹介としようか。俺は笠野玖零。この華籠の国の王の第一子。つまりは王子だ。まあ、そんな事は気にしないで接してよね。よろしく、姫君」

パチンとウインクをする玖零に千姫は顔が赤くなりながらも頷いた。

しかし、すぐに何かに気付いたかのように顔が真っ青になっている。

「お、おお、おおおお、王子様ーっ!？」

「うるさい。耳元で叫ばないでよ。しかも、別にそんな驚く事じゃないだろ」

玖零に向かって、指を差して口をパクパクさせながら驚く千姫の横では、うるさそうに耳を抑えている迅がぶつきらばうにそう言った。しかし、そんな千姫の驚きも無視して、玖零はそのまま自己紹介を続ける。

「そして、姫君を連れてきた男が、木暮弥澄。この国随一の最強剣士だ」

「よろしくな」

先程迄の冷たい眼差しをしていた人と同一人物とは思えない程の無邪気な笑顔で笑う弥澄。そんな弥澄がこの国随一の最強剣士と言われてもあまり信用出来ない。

「それで、こいつが鶴月徠牙。子供かと思って甘く見ると痛い目にあうぞ。徠牙はそこらの大人じゃ勝てない程の剣の腕前してる。でも、頭も天才的だ。この国の軍師をしてもらっている」

「……………」

キツと敵意の眼差しで見られるのは、きっと先程の出来事のせいなんだろう。

すいません、もう痛い目にありました……。

心の中でそう思いながら、未だに睨み付けている徠牙にとりあえず、会釈をした。

「それで、この一見穏やかそうな雰囲気の子が、那賀櫛都架也」

「よろしく願いますね。……ところで、玖零。一見穏やかそうな雰囲気とはどういう意味なのか、是非聞かせてほしいですね」

「……都架也は絶対に怒らせるなよ」

弥澄に耳打ちでそう言われて、千姫は穏やかに微笑みながら背後には黒いオーラを出している都架也を見て、頷いた。

玖零の顔は少々引き吊っていたけれど、玖零はそのまま紹介を続ける。

「そして、こいつは、筑炉規白桜。俺の妹だよ」

「改めて、よろしくね。千姫」

「うん！ ……って、玖零さんの妹！？」

ニコツと微笑まれて、思わず笑い返すが、すぐに驚きの表情に変

わる。つい、玖零と白桜の顔を交互に見てしまう。

確かに少し、似てるかも。特に、物凄く美形という点では……。

「あれ？ でも、なんで名字が違うの？」

「名字？ …… ああ！ 私達の国ではね、男は父方の姓を、女は母方の姓を名乗る事になっているのよ」

白桜の説明に、なるほどと納得するが、すぐに変なのと思いなおしたのだった。

「さて、これで全員紹介したね」

そう言つて笑う玖零の頭が再び、スパアンと気持ち良い程に見事な音と共に叩かれた。もちろん、叩いたのはハリセンを持った悠緋で……。

「堂々と俺を抜かすなんて、良い度胸じゃないか。馬鹿王子」

「さあね。何の事が俺にはさっぱり分からないよ。それより、あんた誰？」

「ふん。馬鹿王子は本当に無能だな。人の名前もろくに覚えられないなんて、猿以下じゃないのか」

「残念。俺は一度見た美人は忘れないんだよ。まあ、野郎なんぞ、興味ないから即行消去するけどね」

「女を追いかける事しか出来ない猿以下の分際が何をぬかす。呆れてもものも言えないな」

「じゃあ、黙ればいいだろ。永久に」

他人に口を挟む隙を与えない程、厳しい言葉の言い争いを続ける玖零と悠緋。

二人の間に、電撃が飛び交つてるように見えるのは、気のせいじ

やないはず。しかし、周りの人はいつもの日常として見ているのか、誰も止めようとしなかった。

「すみませんね、千姫さん。あそこで、玖零と喧嘩しているのが、はたのゆうひ秦野悠緋ですよ」

都架也が穏やかに微笑みながら、そう言って悠緋の名前を教えてくれた。

「……では、改めて名前を教えてくださいませんか？」

「あ、はい！ 朔原千姫です！ これからよろしくお願いします。そして、こっちが……」

ちらりと横目で見れば、退屈そうに欠伸をしている迅の姿が目に入った。

千姫が軽くパシッと迅を叩けば、迅は眠そうな表情のまま、千姫の睨みを受け流した。

「私の幼馴染みの玖裳南迅です」

「……どうも」

どうしても良さそうに挨拶をする迅に千姫が肘打ちを入れようとするが、迅は平然と避ける。

その事に少しだけ、ムツとした千姫だが、それ以上は何もやらなかった。

「……とりあえず、向こうへ行つて、ちゃんとその怪我を手当てしましょう。弥澄さんが応急処置をしてくれたから、血は止まっているけど、念のため」

白桜に指差された所は、ここに来た当初に斬られた腕。

そんなに傷は深くなかったし、手当てをしてもらったので血はもう止まっていた。しかし、色んな事が有りすぎて怪我の存在を忘れていたけど、今更ながら思い出せば、痛みが甦ってくる。

痛みを堪えながら、白桜に案内されるまま、部屋を出ていった。

千姫達が出ていった後の部屋では、玖零達の妙に真剣な表情があった。

伝説に謳われた戦姫の物語。

それと似たような状況に一人の少女が戦姫と同じように異世界から現れた。

それは、戦を終わらす希望の光なのか。

それとも、破滅をもたらす絶望の闇なのか。

千姫の存在は、この物語にどう影響を及ぼすのか。

それを知るものは、誰もいない。

そう、誰もこの先に待ち受けている運命を知らない。

運命の歯車は、どう回っていくのか。

ゆっくりとゆっくりと歯車が動き出す。

刻が来たとしても言うように運命という名の歯車が動き出す。

全ては、誰かが書いた筋書き通りなのか。それとも……。

これからの千姫の動きが運命を決めるのか。

この先に待ち受ける悲惨な未来に千姫は絶望せずに、希望を持っているのか。

沢山の人の思惑が交差するこの世界の歯車は、どんな風に廻って

いくのか。

全ては謎に包まれたまま、物語は幕を開ける

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163z/>

時空夢想記

2011年11月30日22時46分発行